

# 日米：新しい音楽の展望シリーズ2

~テーマ：テクノロジー~

*Japan-USA: Musical Perspectives Series 2*

**JUMP** (ジャンプ) *features*

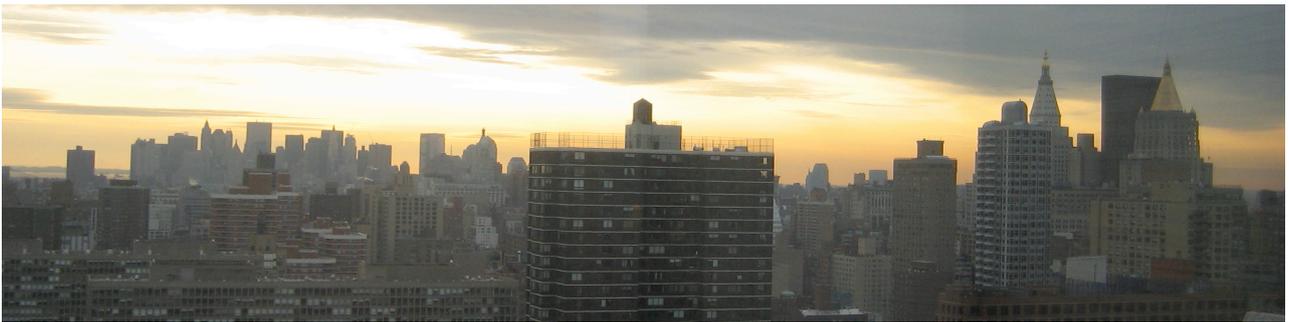
~ *Mari Asakawa, piano and Takashi Saito, saxophone* ~

*in Nagoya, Japan*

朝川万里 (ピアノ)

齋藤貴志 (サクソフォン)

伊藤美由紀 (企画・構成代表)



2007年5月26日(土) 17:00開演/16:30開場

広小路ヤマハホール(ヤマハビル7F)

ヤマハミュージック東海名古屋店・伏見センター

~ *at Nagoya Yamaha Hall, Saturday, May 26, 2007, 5pm* ~

協力:ヤマハミュージック東海名古屋店

～ ごあいさつ ～  
GREETING

本日はお忙しい中、第1回日本公演 *JUMP* (ジャンプ) プロデュース公演「日米：音楽の新しい展望2～テクノロジー～」にご来場頂き、有り難うございます。

2007年2月23日ニューヨークのヤマハホール第1回公演をきっかけに、日米の作曲家を中心に、現代音楽作曲家グループ“ジャンプ”(Japan-USA:Musical Perspectives)を発足しました。ニューヨークを起点とした作曲活動を行っている作曲家、伊藤美由紀が、ニューヨークをベースに活躍するアメリカ人の作曲家に呼びかけて活動開始し、未来への可能性へのジャンプを念頭に、アメリカと日本でコンサートを展開しようという新しい試みです。

今回の名古屋公演では、ヨーロッパ、日本で活躍する現代音楽演奏におけるサクソフォンの第一人者、齋藤貴志、イタリア、日本を中心に活躍し、愛知県立芸術大学でも教えているピアニスト、朝川万里を迎えて、ニューヨーク公演作品の日本初演に加え、作曲家、三浦寛也、伊藤美由紀のピアノ新作なども含んだ、盛りだくさんのプログラムで構成されています。異なった国、場所で創作活動を行っているそれぞれの作曲家の、異なったスタイル、アイディアの作品を、皆様にリアルタイムで聴いていただきたいと思っております。

最後に、この企画を名古屋で開催する事ができますのも、ニューヨークのヤマハの協力に引き続き、ヤマハミュージック東海名古屋店の御協力によるもので、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

2007年5月26日      ジャンプ代表  
伊藤美由紀

1. ティモシー・ポラシェック：「スピーキング 3：ヘッドライン(2001/06)」(ビデオ版/日本初演)  
Timothy POLASHEK: *Speakings III: Headlines* (2001/06) for multimedia version (JP)
2. 大村久美子：「イマージュの錯綜 (2002)」(テナーサクソフォンとエレクトロニクスの為の)  
Kumiko OMURA: *La complication d'images* (2002) for tenor saxophone and computer
3. ティモシー・ポラシェック：「テープの為のソナタ (2003)」(日本初演)  
Timothy POLASHEK: *Sonata for Tape* (2003) for an electro-acoustic composition (JP)
4. 伊藤美由紀：「色ならざる色 (2007)」(ピアノとエレクトロニクスの為の/世界初演)  
Miyuki ITO: *Non-color Color* (2007) for piano and electronics (WP)

～ 休憩 ～

5. ルドミラ・ジャーマン：「ゴーン (2007)」(テナーサクソフォンとエレクトロニクスの為の/日本初演)  
Lyudmila GERMAN: *Gone* (2007) for tenor saxophone and electronics (JP)
6. 三浦寛也：「黄昏/たどりなおして (2007)」(ピアノソロの為の/世界初演)  
Hiroya MIURA: *atardecer / a... retraced* (2007) for piano (WP)
7. 伊藤美由紀：「見えない環 (2006/07)」(アルトサクソフォンとエレクトロニクスの為の/世界初演)  
Miyuki ITO: *Invisible Links* (2006/07) for alto saxophone and electronics (WP)

朝川万里 (ピアノ) / Mari ASAKAWA (piano)  
齋藤貴志 (サクソフォン) / Takashi SAITO (saxophone)

伊藤美由紀 (企画・構成代表) / Miyuki ITO (coordinator)

1. ティモシー・ポラシェック：「スピーキング 3：ヘッドライン (2001/06)」(ビデオ版/日本初演)

スピーキング3：ヘッドライン(2006年版マルチメディアバージョン)は、2人の声のためのテキストと、音を主題とした作品である。私たちは、日々様々なメディアから流れてくるヘッドライン(見出し)に冒されているが、この作品は私なりの回答である。私は、音節のアクセントや韻律、音素の構成などの音韻/音楽的な要素にもとづいて、任意にテキストを生成できるソフトウェアを制作した。この作品は、私がこのプログラムを利用して作曲した3作目にあたり、日常会話の持つリズムに秘められた、音楽的可能性を探求する試みとなっている。

2. 大村久美子：「イマージュの錯綜 (2002)」(テナーサクソフォンとエレクトロニクスの為の)

この作品に於いて、様々なキャラクターを孕(はら)むイマージュが、浮かんでは消え、あるいはまた、複数のイマージュが層をなしながら共存するという、渾沌とした響きをなすが、これらの「出来事」は、次第に複数の異質なものによる錯綜状態を超え、ある別の次元へと指向しつつ幕を閉じてゆく。それは、人間の意識で把握しきれぬイマージュが、さらなる超越を経て生み出されたものを把握したい、というある種の不可能性に対する希求である。この作品のサウンドファイルの作成において、委嘱者で初演者のサクソフォン奏者の齋藤貴志氏と、ソプラノ歌手の加藤富美子氏の格別の御協力をいただいた。

3. ティモシー・ポラシェック：「テープのためのソナタ (2005)」(日本初演)

私にとって、スタインウェイのコンサートグランドピアノの音色と残響は、かぎりない美しさと魅惑の宝庫であり、そこから創作へむけてのインスピレーションを受け続けて来た。この作品は、12平均律に束縛されない“架空の”ピアノを想定して書かれており、そのピアノは、グリッサンドやトレモロが可能だけでなく、保続された音の重なりを分析して得られた、自然倍音の響きを作ることもできてしまう。この作品で使われている全ての音源は、作曲家により書かれ、演奏、録音され、ボコーダーを中心としたデジタル・プロセッシングを通じて処理され最終的に曲としてまとめられた。この作品は、エレクトロニック・ミュージック・コレクティブによるCD：「Incandescence」に、収録されている。

4. 伊藤美由紀：「色ならざる色 (2007)」(ピアノとエレクトロニクスの為の/世界初演)

今年2007年、萩焼の人間国宝、三輪壽雪の作品展覧会に行き、“白という色ならざる色”の、様々な表情、力強い美しさ、静寂のなかの魂みtainなものを感じ、感銘を受けた。まさに、言葉では言い表すことのできない色、テクスチャー、存在である。そんな複雑で、様々な表情をもった色を音楽によって創造しようと試みた。コンピューターでのスペクトラ分析の応用から使用されている音構造、ペダルでのコントロールによるピアノの様々な音域での倍音の溶け合う音色、楽譜からのピアノ素材の録音サンプルを加工したエレクトロニクスと生演奏のピアノの音との微妙な音色の調和、低音の残響など、響きの可能性を追求した。

5. ルドミラ・ジャーマン：「ゴーン（2007）」（テナーサクソフォンとエレクトロニクスの為の／日本初演）

この作品は、2007年2月のニューヨーク公演のために、2006年から07年にかけて作曲され、突然逝去した私の叔母の追憶に捧げられている。叔母の死は、私の家族に深い傷を残したような気がする。彼女の名前から取られたG-A-B-flatの3音は、緩徐部のメロディーの基盤をなすだけでなく、エレクトロニクスによる鐘の音にも表れる。執拗な反復、時として性急なパッセージ、加えてうねるような音の揺れ、そして子守唄を思わせる部分は、この作曲を手がけている間に感じた私自身の感情の起伏を反映している。

6. 三浦寛也：「黄昏／たどりなおして (atardecer / a...retraced)」(2007)」(ピアノソロの為の／世界初演)

私にはどんな曲を書いている、必ず訪れてくる感情があり、今回はその感情に素直に従うことにしました。アルゼンチンの作家フリオ・コルタサルは、シュールレアリスムに影響を受けた奇抜な作品群とエッセイを残していますが、彼が描く黄昏時のパリやブエノス・アイレスはこの上なく魅力的です。時間の推移を忘れさせてしまう蒼白い透明な光。“たれ（誰）かかれ（彼）か”がわからなくなってしまうという日本語“黄昏”の魅力もさることながら、詩人でもあるコルタサルの作品群に繰り返し出てくる、スペイン語で黄昏を意味するatardecerという言葉のイメージも捨てがたい。原曲のタイトルである“atardecer / a...retraced”は、そのatardecerという単語のアルファベットの語順をかえて英語のアナグラムにしたときに、ふと浮かび上がってくる“a...retraced”を対にしています。黄昏時の光は記憶のフィルターを通したら更に曖昧になってしまう、そんな何か(a...)を、この曲ではたどり直して(retraced)みました。

7. 伊藤美由紀：「見えない環（2006/07）」（アルトサクソフォンとエレクトロニクスの為の／世界初演）

この作品は、2006年夏、アリゾナを訪れた際に立ち寄った、チリカワ国立公園の自然の偶然の産物、あるいは、芸術ともいふべき雄大な光景がきっかけとなっている。地平線にまで続く砂漠のなかに現れた山並みに入り込むと、「砂漠の海に浮かぶ島」と呼ばれる2700万年前の火山爆発の際の浸食によってできあがった奇妙な形の尖塔の群像の景観が突如、目の前に現れ、広大さと自然の偉大さに圧倒され、脳裏に焼き付いた。想像を絶するこの光景が、時代を超えて、どのようにして現在のような状態に至ったかを、考えることは、まるで地球のロマンを感じるようだ。その場でこの地形を見ている自分も、また、この地形／自然の一部であることを考えると、目に見えないリンクで、全てはつながり、そのバランスによって私たちは、存在するに違いない。そんなことを想像しながら、静まり返ったこの世のものでないようなその場所で、音を発すると、全ての複雑な群像に反響し、複雑な音が、まるで遠い過去の世界から戻ってきたように、自分に帰ってきた。この作品を完成するに至り、齋藤貴志さんに、エレクトロニクスの作成のための録音、楽器の可能性についての相談など、ご協力していただきました。



チリカワ国立公園（フォト：伊藤美由紀）

## ～ プロフィール ～

### ABOUT THE PERFORMERS



朝川万里 (ピアノ)  
Mari ASAKAWA (piano)

東京生れ、5才よりピアノを柿沼洋子氏に師事。12才で家族と共にニューヨークに移る。15才でウェストチェスター・コンクール優勝、グリーグのコンチェルトを演奏。続いてリンカーン・センターでバッハのコンチェルトを演奏。翌年16才でジュリアード音楽院に入学し、ジョルジュ・シャンドール氏に師事。卒業後はエール大学大学院音楽科に進む。卒業後はアメリカ国内の数々のコンクールに入賞。1998年よりイタリア、ペスカーラ音楽院でメツェーナ氏に師事する。1999年、フロレストノ・ロッソマンディ国際ピアノコンクール入賞。2002年には、すみだトリフォニーホールとスイスのティチノ・ムジカ音楽祭でリサイタルを行い好評を得る。2003年春、ラ・スペツィア、ヴェネツィア、ナポリで連続リサイタル。2003年にはプロコフィエフ没後50年を記念して、イタリア、日本、イギリスを含む合計10ヶ所でプロコフィエフ・ピアノ・ソナタ・リサイタルを開催した。現在、イタリア各地の講習会、音楽祭でメツェーナ氏の助手を務める。2005年2月、イタリア PHOENIX Classics からプロコフィエフ：「戦争ソナタ」(第6番、第7番、第8番)のCDがリリースされた。2005年4月より愛知県立芸術大学非常勤講師。2005年6月、東京津田ホールにてCD発売記念リサイタルを開催し大好評を得る。2006年には九州、群馬、イタリアでリサイタルを開催。朝川万里公式ホームページ：www.mariasakawa.com

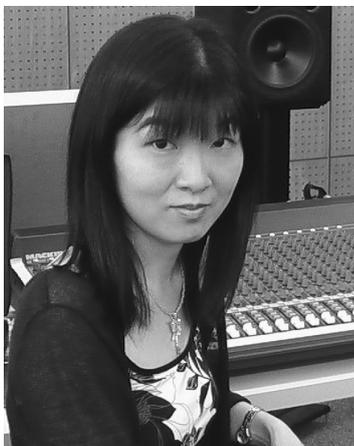


齋藤貴志 (サクソフォン)  
Takashi SAITO (saxophone)

1961年東京都出身。国立音楽大学卒業、大室勇一氏に師事。ボルドー音楽院にてサクソフォンと室内楽をジャン・マリー＝ロンデックス氏に、更に室内楽をジャン・マリー＝ラモット氏に師事。サクソフォンと室内楽で一等賞、更に室内楽でボルドー市栄誉賞を審査員全員一致により受賞し卒業。在学中、各種音楽祭やフランス国営放送他に出演。インターナショナル・サクソフォンアンサンブルでコンサートマスターを、又ベサック音楽院で教鞭を執る。帰国後のワークショップ活動は、サクソフォンの邦人レパートリー拡張に大きく貢献する。1994年より自らプロデュースするリサイタル・シリーズ『現代(いま)を聴く』を開始し、好評を博している。1996年、現代音楽アンサンブル ENSEMBLE d'ÂME /アンサンブル・ダム (sax. vn. pf. perc.) を結成、代表を務める。現音、作曲家協議会、秋吉台国際音楽フェスティバル、サントリー・サマーフェスティバル、ISCM World Music Days (横浜：2001年、香港：2002年)、NHK-FM「現代の音楽」等の他、国際サクソフォンコンGRESS (日本、イタリア)、Rainy Days (ルクセンブルク)、ブローニュ・ビヨンクール音楽院でのマスタークラス(フランス)、テグ国際現代音楽祭(韓国)等、海外でも活躍する。CDは、自らプロデュースしたソロ作品「絶望の天使」がALCD-9046から、室内楽作品がQUANTUM/QM6901(フランス)及びmode77(アメリカ)より出ている。

### ABOUT THE COMPOSERS

#### 伊藤美由紀 (作曲家)



愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程(ニューヨーク)、コロンビア大学博士課程(ニューヨーク)修了。寺井尚行、ピエール・シャルベ、トリスタン・ミュライユ、フィリップ・ルロー各氏に師事。文化庁芸術家在外研修員として、IRCAM(フランス国立音響研究所)にて研鑽を積む。神奈川県合唱曲作曲コンクール、アボット室内楽作曲コンクール(ボストン)、Boris & Edna Rapoport 賞(NY)、名古屋文化振興賞、日本交響楽振興財団作曲賞入選など、受賞。ハーモニアオペラカンパニー(NY)、東京オペラシティ、ミュージック・フロム・ジャパン(NY)などによる作品委嘱ほか、カーネギーホール(NY)、レゾナンスフェスティバル(パリ)、ISCM世界音楽の日々(香港)、国際コンピューター音楽会議(マイアミ)をはじめ、世界各国の現代音楽祭で作品が演奏される。ゲラルド・オーシタフェローシップとともに、カリフォルニア・ジェラシ・アーティストレジデンシーにて創作活動。現在、愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、千葉商科大学にて教鞭をとる。大村久美子氏と、NymphéArt(ニンフェアル)共同主催。「Fading Memories…」が、関澤真由美マリンバソロアルバムCD「My Favorite Things」(AUCD-13)に収録。



### 大村久美子 (作曲家)

東京藝術大学作曲科を卒業後、ドイツ・エッセンのフォルクヴァング芸術大学にて、作曲をニコラウス・A・フーバー氏に、電子音楽をルドゥガー・ブルンマーの各氏に師事。その後パリの IRCAM (フランス国立音響研究所) にて電子音楽の研鑽を積む。第15回入野賞(1994)、オランダのガウデアムス作曲賞グランプリ(1998)、ドイツのハノーファー・ビエンナーレ(1999)、武生作曲賞(2004)などを受賞。作品は、ドイツのヴィッテン音楽祭、フランスのアゴラフェスティヴァル、国際コンピュータ音楽会議(1999 ベルリン)、アジア音楽祭などの、ヨーロッパや日本の各地で演奏され、齋藤貴志サクソフォン作品集 CD (ALM Record)、Computer Music Journal DVD (MIT、アメリカ)、ヴィッテン音楽祭 CD (西ドイツ放送局) に収録されている。現在、文化庁芸術家在外研修員として、ドイツの ZKM (芸術とメディアの為のセンター) にて、創作活動を行っている。



### 三浦寛也 (作曲家)

1975年に仙台で生まれ、学生時代をモントリオール、カナダで過ごした三浦寛也は、現在アメリカを転々としながら音楽活動を行っている。“触覚的で酸味のきいた魅力は、絶え間なく均衡を変化させる三浦の筆致によるものである。”とニューヨーク・タイムズ紙に評された三浦の作品は、アネンバーグ・センター (フィラデルフィア)、エマーソン・ホール (アトランタ)、マーキン・ホール (ニューヨーク、リンカーン・センター)、などで演奏され、日本、フランス語圏カナダ、アメリカという音楽的アイデンティティの狭間を揺れ動く作風に注目が集まった。これまで So Percussion、アメリカン・コンポーザーズ・オーケストラ、ニューヨーク・ニューミュージック・アンサンブルなどからの委嘱があり、近年手がけている映画音楽の作曲なども含め、音楽を公開する“場”に作品の傾向はしばられなくなってきている。コロンビア大学博士課程修了。現在ベイツ・カレッジ助教授。



### ルドミラ・ジャーマン (作曲家)

ウクライナ生まれ。ニューヨークで教育をうけ、ブルックリン大学卒業 (ニューヨーク)、マンハッタン音楽院 (ニューヨーク) 修士、博士課程修了。ブルックリン大学ミリアム・ギデオン奨学金、ミート・ザ・コンポーザー助成金、Ivar Mikhaschoff 助成金、カンタータ・チェンバー・シンガーズ賞などを受賞。最近の作品では、男声合唱のための「ルクス・エテルナ」(2004、ラトヴィア初演)、ソロリサイタル4作品初演 (2006、ニューヨークヤマハホール)、「パウンド・リッジ」(2006、ソニック・チャンネルズ・フェスティヴァル、ニューヨーク)、混声合唱の為の「A Clear Midnight」(2006、ニューヨーク) などが、ある。現在、ロング・アイランド音楽大学 (ニューヨーク) にて教鞭をとる。



### ティモシー・ポラシェック (作曲家)

エレクトロニクス作品では、様々な音の音程、音色の操作にこだわると同時に、意味の無い言葉のサウンド世界を音楽の中に創造し、作品を制作する。また、コンピューター、ミュージックテクノロジーを、様々なメディア、アンサンブルなどの為の作品を作曲する為に応用する。現在、リーマン・カレッジ (ニューヨーク) の教授、エレクトロニック・ミュージックセンターのディレクターである。コロンビア大学博士課程修了。「ティモシー・ポラシェック作品集 CD: Wood and Wire」(アルバニーレコード)、エレクトロニックミュージック作品 CD: 「Incandescence (2003)」、「Defiant (2004)」が、リリースされている。

### <協力スタッフ>

舞台：吉川敦、鈴木昭宏

会場：牛島安希子、久野麻衣

主催：JUMP（ジャンプ） [japanusamp@yahoo.com](mailto:japanusamp@yahoo.com)

協力：ヤマハミュージック東海名古屋店

後援：名古屋芸術大学音楽学部